FROM United Kingdom

中野香織

㉞豪州俳優アンド英国海軍英雄

めったに「ほめ」がでない敦子師匠から実に久しぶりにでた「ほめ」、しかも「海洋ものベスト5に入る」との太鼓判つきとなれば観にいかないわけにいかないでしょう、「マスター・アンド・コマンダー」。

古きよき時代のイングランドの男の論理（敦子さん的にいえば「やせがまん」）全開ですね。史実もリンクさせてて、イングランドマニアにもたまらない映画でしたよ。

１８０５年っていう設定だけど、ガラパゴス島でカメの採寸をするポール・ベタニーの姿が30年後の博物学者ダーウィンのイメージと重なるばかりか、水夫が一羽のアホウドリを撃ったことで思わぬ災いがふりかかるという設定は、英文学史に燦然と輝くS・T・コールリッジの「老水夫行」（１７９８年）っていう詩をほうふつとさせるし、R・クロウが最後の決戦前に水夫たちに向かってぶつ演説も、１８０５年にトラファルガーの海戦でネルソン提督が旗艦ヴィクトリー号に掲げた不滅の信号「イングランドは各員の責務遂行に期待する」を連想させて、震えがきました。

いや、おたく全開で恐縮です。恐縮ついでに続けさせていただくと、タイトルの「マスター・アンド・コマンダー」って、１８１４年まで英国海軍の正式な地位の名称だったんですよね。航海長にして最高指令官。「アンド」はイコールの意味なんですが。

似た発想の表現が、「オフィサー・アンド・ジェントルマン」でしょうか。「将校と紳士」じゃなくて「将校にしてかつ紳士」。

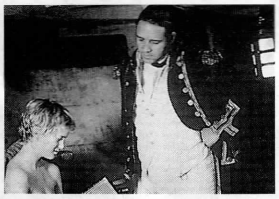
でね、その将校の地位を得るためには、戦功は関係なかったんですよ。お金。軍隊における地位はお金で購入するシステムだったんです！　この制度は封建時代から１８６８年まで続いてます。将校の地位を買える＝紳士としての教育を受けられる環境にいた、ってわけだから、「将校にして紳士」になるのは表向きは当然なんですが、金さえ出せばという事情から察せられるように、両者の理想を体現する男なんてレアもの……ってな皮肉な見方をされることも多かったようです。リチャード・ギアの「愛と青春の旅立ち」の原題がまさに「アン・オフィサー・アンド・ア・ジェントルマン」でしたが。理想の紳士将校なんて、英国紳士階級の部外者がめざすものなのかな。

理想の英国海軍ヒーローも、部外者のほうがはまるようで。軍艦バウンティ号の反乱航海士F・クリスチャンを演じたエロール・フリンやメル・ギブソン、スペインの無敵艦隊を撃破したF・ドレイクを演じたロッド・テイラー、そして今回のクロウ、と「オーストラリア俳優・アンド・英国海軍ヒーロー」の地位、堂々アリですね。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



「マスター・アンド・コマンダー」
２月28日より日劇１ほか
全国東宝洋画系にて公開

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作＝井上陽子